

Alphonse Mucha Museum News

堺 アルフォンス・ミュシャ館 (堺市立文化館)



Contents

展示報告 + イベントレポート
(2019年3月-2020年3月)
巡回展レビュー + 作品紹介
ミュシャ館インフォメーション
主な作品修復報告

vol. 9

アルフォンス・ミュシャ
《バラ：四つの花》
1897年
リトグラフ、紙

ミュシャの想い スラヴ叙事詩への道のり

2019年3月9日(土) ▶ 6月30日(日)

ミュシャの故郷であるチェコは長年ハプスブルク家の施政下であり、チェコに住むスラヴ人たちはドイツ人によって治められてきました。民族独立の動きが世界的に高まる中、1900年にパリで開かれた万国博覧会のために、ミュシャはボスニア・ヘルツェゴヴィナ館のパヴィリオンを飾る壁画の仕事に依頼されました。ボスニア・ヘルツェゴヴィナは当時、チェコと同じようにオーストリア＝ハンガリー帝国による支配を受けていました。ミュシャは壁画の仕事のために現地を旅行し、この出来事がきっかけの一つとなり、祖国チェコを含むスラヴの人々に対して芸術で貢献したいという想いを強くしていきました。そして、スラヴ民族の古代から近代の歴史を主題とした大連作《スラヴ叙事詩》の構想を始めます。第1章では、ボスニア・ヘルツェゴヴィナのパヴィリオンの壁画の下絵など、万博に関する作品を展示しました。

ミュシャは幼い頃から画家を目指し、ミュンヘンやパリで美術学校に通ってデッサンの腕を磨いて写実的な画風を学び、将来は当時画家の中でも最も権威のあった歴史画家になることを望んでいました。しかし画業初期にパリで生計を立てることを迫られたミュシャは、ポスターのデザインや本の挿絵等、当初の希望とは異なる分野で仕事をするようになります。しかし1900年のパリ万博開催前後から、それまでのデザイナーとしての仕事とは異なる写実的な油彩作品を描くなど、これまでにない制作上の試みを行うようになりました。



アルフォンス・ミュシャ 《1900年パリ万国博覧会 ボスニア＝ヘルツェゴヴィナ館壁画（下絵）》
1899-1900年 墨、紙

さらに1904年以降、アメリカに渡って資金集めを行い、《スラヴ叙事詩》制作に向けて着々と準備をし始めました。そして壮大な歴史画を描きたいという想いを《スラヴ叙事詩》で果たします。第2章ではパリとアメリカを歩き来しながら、《スラヴ叙事詩》制作という新たな目標に向かっていった過渡期の作品を中心にご紹介しました。

アメリカで《スラヴ叙事詩》制作の資金援助の約束を取り付けたミュシャは、1910年にチェコへ帰国し、約16年をかけて巨大な20点の連作《スラヴ叙事詩》をひとりで制作します。しかしミュシャのチェコへの貢献は《スラヴ叙事詩》だけに留まりませんでした。チェコの演劇や地域の催し物のポスター、1918年に独立したチェコスロヴァキア共和国のための新紙幣や切手、警察の制服のデザイン、またチェコ独立の象徴的な場所であるプラハ市民会館の「市長の間」の装飾も行いました。ミュシャはチェコに帰国するまでは商業的な作品を多く手がけてきましたが、チェコに帰ってからはチェコの人々にとって役立つことを成す、ということの方針として仕事を請け負いました。第3章では、《スラヴ叙事詩》に関連する作品、その他ミュシャが祖国のために制作した作品を中心にご紹介しました。

本展では、ミュシャが画家として、また人生をかけて成し遂げなかった祖国への貢献を、《スラヴ叙事詩》の制作までの道のりを軸にご紹介しました。パリ時代の優雅な女性像のポスターが有名なミュシャですが、グラフィック作品だけではなく油彩作品や素描など、肉筆の作品によってミュシャの息遣いを来館者に感じて頂きました。(Y.K.)



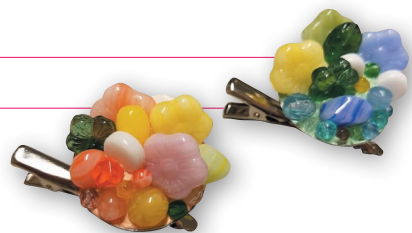
Event Report

● チェコビーズで作るコサージュ

4月28日(日) ①11:00~12:00 ②13:00~14:00

講師／戸崎由佳氏（一般社団法人 グルージュエル協会認定講師）

▶ 日本ではあまり見られないボヘミア・ガラスを使ったチェコビーズでコサージュを作りました。ガラスでできた色とりどりのビーズを、参加者の皆さまが各々で飾り付け、キラキラと輝く個性的なコサージュができました。



● 講演会「ミュシャの原動力-世紀転換期のチェコと《スラヴ叙事詩》」

5月11日(土) 14:00~15:30

講師／小野尚子氏（兵庫県立美術館学芸員）

▶ チェコ時代のミュシャがご専門の小野先生に講演頂きました。日本ではあまり知られていないパリに来る前のミュシャに注目し、青年時代のミュシャの交友関係や思想がチェコにおける《スラヴ叙事詩》の評価にどのようにつながったのかなど、まだまだ知られていないミュシャの貴重なお話をして頂きました。当日は定員を大幅に上回る約80名の参加者が集まり、盛況のうちに終わりました。



アルフォンス・ミュシャ没後80年を記念して開催された本特別展では、ミュシャがパリで制作した代表的な装飾パネルを中心に同時代に活躍したルネ・ラリック(1860-1945)のジュエリーやガラス工芸を作品に彩られた花や植物にスポットを当て紹介しました。さらに公益社団法人日本フラワーデザイナー協会(NFD)の協力のもと作品とコラボレートしたアーティフィシャルフラワーによるフラワーアレンジメントも行いました。

アール・ヌーヴォーは工芸品や装飾、ポスターを始めとしたデザインなどの応用芸術を中心に19世紀末に流行した芸術様式です。芸術家にとっての最大の靈感源は植物や花などの自然でした。自然は19世紀末になるとこれまでの時代とは異なる特別な存在となって再認識されます。また自然科学の急速な発展は芸術家が科学をとおして自然を見直すことにも貢献しました。自然や生命の根源的なものに対する新たな関心がこの時代の芸術家の創作理念を刺激していったのです。ミュシャは自然を四季として形にし、また『装飾資料集』には詳細な植物のスケッチを収録しました。

一方、ジュエリーとガラスの工芸作家のラリックは、セイヨウタンポポといった身近な植物を観察し描写しています。第1章ではミュシャやラリックの装飾資料集や残されたスケッチから自然へのまなざしを紹介しました。

19世紀にみられる自然科学の進歩でさえも、なお解明されない仕組みの謎により自然体系の恐るべき力に気づきはじめてのもこの時代でした。そのことがかえって生命の底知れない力への新たな興味が生まれる動機となってゆきます。それは、従来の作家たちのような自然の様子をそのまま作品上で再現するものとは異なる関心でした。ミュシャは生命のエネルギーそのものを線のかたちに

委ねます。それは、線が一つの生命体となって有機的にうごめく姿に重なるかもしれません。その様子はミュシャやラリックのまるで花々の化身のような象徴的な女性像につながり、変貌する自然ととらえることが出来るでしょう。生命の不思議さを体現する現象がそのような形として造形されるのです。

ラリックは日本原産の花々を多く作品に登場させたことでも知られておりますが、展覧会に合わせた植物の同定からミュシャの作品中にも日本原産の花々が描かれている可能性が分かりました。そこには19世紀末に流行したジャポニスムが背景にあげられます。第2章ではミュシャの連作《四つの花》やラリックの工芸作品など華やかな花々とともに描かれた作品を植物の紹介と合わせて展示しました。

自然を靈感源としたアール・ヌーヴォーの芸術家は、線や色彩そのものの美しさを発見し、やがてそれらは装飾をとおして表現されます。蔓草がうねるような奔放な線、流れる水のような流動的な形そして咲き乱れる花のような非対称な配置などこれらの造形表現は自然のなかに見いだせる「かたち」としてミュシャとラリックのそれぞれの作品にみることが出来るでしょう。第3章ではミュシャの描く装飾パネルやラリックによる透明ガラスやオパールセントガラスを活用したガラス工芸を中心に装飾の「かたち」が様々な姿で作品に表されている様子を紹介しました。(N.N.)



アルフォンス・ミュシャ《花》
1897年 リトグラフ、紙



Event Report

●フラワーデザインワークショップA

7月21日(日) 14:00~15:30

講師：小山光子NFD名誉本部講師
(小山光子フラワーデザインスタジオ主宰)

▶ミュシャの《バラ：四つの花》をイメージしたフラワーアレンジメントを作りました。バラの優雅な雰囲気はミュシャの作品にぴったりで華やかなアレンジメントに仕上がりました。



●フラワーデザインワークショップB

8月17日(土) 14:00~15:30

講師：高木優子NFD本部講師
(Quelle(クヴェレ)主宰)

▶アール・ヌーヴォーをイメージした曲線の美しい植物を使ったアレンジメントを作りました。一つとして同じ仕上がりのない美しいアレンジメントができました。



●講演会「動植物デザインに宿る生命力—ミュシャとラリックの装飾をよみとく」

9月22日(日) 14:00~15:30 講師：鶴岡真弓氏 (多摩美術大学芸術人類学研究所 所長/教授)

▶ケルト芸術をはじめとして、装飾について広くご専門とされている鶴岡先生にご講演頂きました。ミュシャの白ユリの花から、ラリックのトンポポまで瑞々しく表した生命力にあふれる装飾・デザインをお話くださいました。人類史的なスケールから、オークや梅花など植物モチーフの創造の源泉についての凝縮された話に参加された皆様はとても引き込まれたようです。再講演を熱望する声を多くいただきました。



●展示解説ツアー 堺 アルフォンス・ミュシャ館×箱根ラリック美術館

8月12日(月・祝) 14:00~15:00

解説：浦川佳代子氏(箱根ラリック美術館学芸員)
西川奈津美(堺 アルフォンス・ミュシャ館学芸員)

▶企画展の見どころをレクチャーし、参加者の方たちと作品を鑑賞しながら解説をしました。ミュシャだけでなくラリックのジュエリーやガラス作品の技法まで詳しく聞けるあつという間の1時間でした。



●フラワーデザインワークショップC

9月7日(土) 14:00~15:30

講師：久恒和子NFD名誉本部講師
(HISATUNEフラワーデザイン
スクール主宰)

▶カーネーションやバラのプリザーブドフラワー、ドライフラワーを使って《四つの花》をイメージしたハーバリウムを制作しました。



世紀末のパリ ミュシャとポスター

2019年10月19日(土) ▶ 2020年3月1日(日)

産業革命によって大量生産・消費の時代に突入したヨーロッパでは、多くの人が集まる都市で商品を宣伝することが重要になりました。また石版画の普及と多色刷技術の発展は、イラストを用いたポスターの制作を容易にしました。結果的に、多くの画家たちがポスターを描くようになり、個性的なポスターが次々と作られ、ポスター芸術が隆盛します。第1章では、パリの街を色とりどりに飾ったミュシャや同時代のポスターを展示し、当時の華やかなパリ的一端を感じて頂きました。

19世紀末のヨーロッパは大きな戦争がなく、また科学技術や経済の発展により、新しい文化や芸術が栄えた「ベル・エポック」(良き時代)を経験します。しかし一方で、国際関係の緊張や物質文明の隆盛に対して、その行先の不安から退廃的な雰囲気も漂っており、芸術家たちの中には暗い終末思想に影響を受ける者も現れました。また科学技術の発達に伴ってこれまで謎に包まれてきた事柄が明るみに出る一方で、人間の内面や精神世界が注目されるようになり、宗教や神秘的なテーマを主題とした象徴主義芸術が流行しました。ミュシャも心霊研究や降霊術などのオカルティズムに傾倒



アルフォンヌ・ミュシャ《瞑想》1896年頃 水彩、カンヴァス

し、このことは少なからず作品に影響を与えていると考えられます。第二章では、優雅で華やかな女性像や装飾を用いたポスター作品とは対照的な、ミュシャの神秘的で謎めいた作品の数々を展覧しました。

1900年のパリ万国博覧会で絶頂期を迎えたアール・ヌーヴォーの流行はやがて終わりを迎えます。20世紀に入ると人々の生活はますます変化していきます。工業化が進み、新素材や新技術によってますます大量に製品が作られ、車や汽船は改良され、飛行機が飛び、汽船で旅行ができるようになり、生活はより便利に、そしてスピード化していきました。このような時代の変化の中で生じた新しい価値観は、建築や室内装飾、グラフィックデザイン、そしてキュビズムや未来派などの前衛芸術、また様々な文化と共に新しいポスターデザインの源流となりました。アール・ヌーヴォーとは対照的な直線や幾何学模様、明快な色彩などによって1920～30年代のポスターに表されたデザインは、1925年にパリで開催された「現代装飾美術・産業美術国際博覧会」にその名を由来する新しい芸術潮流「アール・デコ」の典型とも言えます。第3章では、アール・ヌーヴォーに代わった新しい時代のポスターをご覧頂きました。

本展では、ポスターがパリの街を彩った華やかな時代の雰囲気とともに、精神世界への関心など、一側面では捉えられない世紀末のパリを、ミュシャや同時代の画家たちの作品を通じてご紹介しました。さらに20世紀初頭のポスターによって、19世紀末から20世紀初頭のデザイン潮流の一端をご紹介する機会となりました。(Y.K.)



Event Report

●講演会「ふたつのポスター黄金期 —アール・ヌーヴォーとアール・デコ—」

1月19日(日) 14:00~15:30

講師：今井美樹氏 (大阪工業大学教授)

▶デザイン史を専門とされている今井先生にアール・ヌーヴォー時代のミュシャや同時代のポスター画家、そしてアール・デコまでの19世紀末から20世紀前半のデザインについてご講演頂きました。数多くの作品と当時の写真をスライドで見ながらお話頂きました。参加者のみなさまは、ミュシャや同時代に活躍した画家たちの様々なポスター、そしてポスターに彩られたパリの街角の写真を見て、当時のパリの街の様子をイメージしながら作品について学ぶことができる大変貴重な機会となりました。



●シルクスクリーンワークショップ

2月8日(土) 14:00~16:00

▶ミュシャの描いたデザインを使って、シルクスクリーンでトートバッグを作りました。参加者の皆様からは、印刷の工程を実際に体験してわかりやすかったとお声掛け頂きました。ミュシャのデザインと自分のデザインを掛け合わせたり多色刷りにチャレンジされたりと、自分だけのオリジナルバッグができたことと楽しんで頂けました。





アール・ヌーヴォーの花園

▶箱根ラリック美術館

2019年10月26日(土)～2020年1月26日(日)

箱根ラリック美術館と合同で開催した「アール・ヌーヴォーの花園」展はミュシャ館初めての自主企画の巡回展でした。イベントではミュシャ館と箱根ラリック美術館の両館学芸員と一緒に互いの館でミュージアムツアーを開催し、様々な面で相互に協力しながらミュシャとラリックが鑑賞できる展覧会となりました。



西川学芸員解説の様子

ミュシャと日本、日本とオルリク めぐるジャポニスム

▶千葉市美術館・2019年9月7日(土)～10月20日(日)

▶和歌山県立近代美術館・2019年11月2日(土)～12月15日(日)

▶岡山県立美術館・2020年1月4日(土)～2月11日(火・祝)

▶静岡市美術館・2020年4月11日(土)～5月24日(日)〈予定〉

アルフォンス・ミュシャと同じくチェコ出身の画家エミール・オルリクに焦点を当てた展覧会です。ジャポニスム(日本趣味)の影響という文脈において彼らに影響を受けた日本の作家そして同時代のチェコの美術を取り上げ、グラフィックを中心に展開した東西交流を紹介しました。本展では《サロン・デ・サン》を含めた19点を貸出し、講演会ではミュシャ館学芸員がミュシャ作品の特徴や土居氏についてお話ししました。



西川学芸員講演の様子

(上)千葉市美術館、(下)岡山県立美術館



和歌山県立近代美術館 展示風景



○当館が貸出した作品をピックアップして紹介。



《トラピスティーヌ》

1897年 リトグラフ、紙
2060×735mm

〈ミュシャと日本、日本とオルリク めぐるジャポニスム〉展に貸出し

すくな髪、背景の余白により、トラピスティーヌ酒の発祥であるキリスト教のつましく禁欲的なイメージが表されている。

しかし一方で、画面上半分の装飾的な背景や女性の体に巻き付く花は、画面に華やかさを与えている。そして身体の線にぴったりと沿った衣装を着て、伏し目でお酒をこちらに差し出す女性の姿は官能的であり、お酒の持つ誘惑的な魅力も暗示しているようである。女性の手と垂直に下りた髪が、鑑賞者の視線を画面右下のお酒に誘導しており、優雅で伝統的な商品イメージを作りながらも効果的に商品アピールを行うミュシャのデザイナーとしての巧みな手腕が発揮された作品である。(Y.K.)

《サラ・ベルナルル:ルフェーヴル=ユティル》

1904年 リトグラフ、紙
693×511mm

〈パリ世紀末ベル・エポックに咲いた華〉展に貸出し

をし、長い旅の末彼女に会って愛を打ち明けるが、その直後に息絶えるという悲恋のストーリーであった。

劇の第3幕でミュシャがデザインしたユリの冠とドレスを着て女優サラ・ベルナルルが演じるメリザンドが登場する。このユリの冠を被ったサラの姿を、ミュシャは後にいくつかのポスターで使い、この姿がサラのイメージとして広まっていった。本作はその一つで、サラが演じるメリザンドの姿をルフェーヴル=ユティル社のビスケットの宣伝ポスターとして使ったものである。

1895年当時、既に50歳を越えていたサラが、美貌で評判の遠い国に住む姫君を演じた。本作ではこの姫を演じるサラの姿を極度に美化してはいない。しかし油彩で描いたような落ち着いた色合いや両手を胸に森の中で祈るようなポーズ、こちらを見上げる可憐なサラの表情によって、遠い国に住むお姫様をロマンティックな雰囲気演出している。2年後の1897年にこの演劇は『トリポリの姫君イルゼ』として小説化され、この本でミュシャは挿絵と装丁を担当することになる。(Y.K.)

1895年、劇作家エドモン・ロスタンによる『遠国の姫君』が初演された。劇の舞台は13世紀、あるフランスの青年がトリポリの国の姫メリザンドに恋



パリ世紀末ベル・エポックに咲いた華 サラ・ベルナルルの世界

- ▶群馬県立近代美術館・2018年9月15日(土)～11月11日(日)
- ▶箱根ラリック美術館・2019年3月28日(木)～6月30日(日)
- ▶いわき市立美術館・2019年7月20日(土)～9月1日(日)
- ▶横須賀美術館・2019年9月14日(土)～11月4日(月・祝)
- ▶渋谷区立松濤美術館・2019年12月7日(土)～2020年1月31日(金)

19世紀半ばから20世紀初めのベル・エポックと呼ばれた繁栄の時代に活躍したサラ・ベルナルルを初めて日本で紹介する大規模な展覧会です。サラは当時パリで活動していた駆け出しのミュシャを見出しました。ミュシャは6年間の専属契約を結んだことで一躍人気のデザイナーとなります。本展は写真、ポスター、肖像画、ドレスの他に同時代の作品をとおして大女優サラを再発見し足跡をたどる展覧会です。当館からはサラが描かれた演劇ポスターを中心に22点を貸出しました。



群馬県立近代美術館 展示風景



渋谷区立松濤美術館 展示風景

！ 先着プレゼント企画を行いました

今年もミュシャ館限定オリジナルカレンダー(非売品)を制作しました。クリスマスコンサートにご参加頂いた方や当館のミュージアムショップでお買い物頂いた方に先着でオリジナルカレンダーをプレゼントしました。また、ミュシャの命日(7月14日)には過去の企画展ポスターもプレゼントしました。ミュシャ館のFacebookではプレゼント企画やイベントなど様々な情報を発信しています。ぜひチェックしてくださいね。



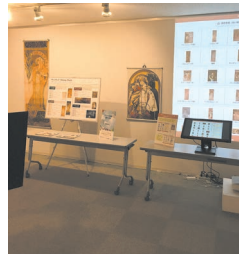
！ 公式作品集 『アル・ヌーヴォーの華 アルフォンス・ミュシャ』

ミュシャの没後80年を機に、講談社より当館公式作品集が発売されました。堺市が所蔵するミュシャの習作からポスター、油彩、彫刻、宝飾品など、世界有数のミュシャコレクション約750点を、多数のカラー写真で掲載した公式作品集です。テーマ別に作品を解説し、他の作品集では見ることができないミュシャの初期作品や習作も掲載しています。またミュシャが挿絵を描いた物語『白い象の伝説』を抄訳とともにご紹介しています。ご購入は全国の書店にて。是非お買い求めください。



！ アルフォンス・ミュシャ没後80年企画 『生きるミュシャ』

2019年10月26、27日にグランフロント大阪北館2階ザ・ラボ内アクティブスタジオにて、そして11月30日、12月1日には堺市立文化館にて、関西大学総合情報学部AMDプロジェクトが、堺市との連携事業の一環として開催されました。関西大学の学生のみならず「現代のミュシャ作品」のデジタル映像や《スラヴ叙事詩》のスケール感を体験できるVRコンテンツ、クイズアプリなど、最新技術を駆使してミュシャの作品を現代に蘇らせました。また当館の川口学芸員による講演会では、ミュシャの作品や堺市との関係についての解説を行いました。



！ 「堺市駅前スマイルファミリーフェスティバル」での出張ワークショップ

2019年5月18日、堺市駅前の東雲公園で毎年恒例の「堺市駅前スマイルファミリーフェスティバル」が開催されました。当館からは、ミュシャのデザインのはんこを消しゴムで作るワークショップを出張で行いました。当日は家族連れのお客様を中心に多くの方にご参加頂きました。ミュシャのデザインをじっくり観察しながらはんこのデザインをする子、また自分だけのオリジナルのデザインではんこを作ったりする子など、ミュシャの作品を通じて多くのお子様たちがはんこ作りを体験する楽しい時間となりました。



作品名	制作年	技法・材質	修復後寸法(デ×コ)	処置内容	委託先
《1918-1928:独立10周年》	1928年	リトグラフ、紙	1225×855	乾式清掃、水洗、折れの補強、破れ接合、全体裏打ち、伸展乾燥、額一式新調	山領絵画修復工房
《プラハ市民会館市長ホール壁画の習作》	1911年	鉛筆、水彩、紙	371×298	乾式清掃、テープによるしみの洗浄、破れの接合、プレスによる形状整合、グレージングの交換など	山領絵画修復工房
《着飾った女性》	1910年	インク、紙	222×143	テープの除去、ドライクリーニング、加湿フラットニング、折れの補強、破れの補修、ブックマットの作成など	森絵画保存修復工房

※作品寸法の単位はmm.

堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市立文化館)

観覧料 一般 510円 高校・大学生 310円 小・中学生 100円

*小学生未満・堺市にお住いの65歳以上・障がい者手帳をお持ちの方と介助者は無料 *20人以上は団体割引適用

開館時間 9時30分～17時15分(入館は16時30分まで)

休館日 月曜日(休日の場合は開館)、休日の翌日(翌日が土・日・休日の場合は開館) 年末年始、展示替期間

交通 JR阪和線堺市駅下車徒歩約3分 JR快速にて・大阪から約25分・天王寺から約10分・和歌山から約60分・関西国際空港から約40分

590-0014 大阪府堺市堺区田出井町1-2-200 ベルマーシェ堺式番館

TEL:072-222-5533 FAX:072-222-6833

http://mucha.sakai-bunshin.com 公式ウェブサイト



公式 Facebook ページ 好評更新中!

